

「テロとの戦い」のかげで 「フライリピン」のムスリム問題のいま

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(あかみね・じゅん)

赤嶺 淳

最初にことわっておく。わたしは、イスラームの専門家でもないし、イスラーム教徒（以下、ムスリム）でもない。しかし、一九九〇年以來東南アジアでかわつてきた社会では、そのほとんどでイスラームが信奉されている。当然ながら調査地



神との対話

(2002年9月、ミンダナオ島のサンボンガ)

は、ムスリムらしいふるまいがもたらされたように、わたしの東南アジア体験はイスラームぬきでは語れない。二〇〇一年四月から本学に勤務するようになったわたしは、それまでも不安定ではあるものの、いつでも調査にかけられた環境から反転して、安定してはいるものの、調査旅行に制限が課される生活をおくることとなった。

あれほど待ちこがれていた夏休みも、あつという間におわり、帰国準備をしていたマニラで、わたしは「9・11」をむかえたのであった。事件の衝撃のみならず、その後のイスラームに関する報道にふれ、ただ教科書的に理論や学説史を解説するだけでは、混迷をふかめるばかりの現代社会において、異文化理解など推進できないのではないかと、わたしは無力感にいらだった。わたしのイスラーム体験にもとづき、ふつうのムスリムの生活について語ろう。そのことから、マスメディアが語るイスラ

ーム像を相対化してみよう。そのいとなみをつうじて、異文化研究のむずかしさを伝えよう。そんな気持ちで、教壇に立ったのを覚えている。

以下では、「七世紀以來なんとなく日本という「まとまり」を形成してきた日本社会とは対照的に、多民族多言語社会である東南アジアがかかえる国民統合の困難さを、アメリカ合衆国が訴える「テロとの戦い」とかさねあわせて考えてみたい。

モザイク的、東南アジア

今日的感覚では東南アジアを ASEAN（東南アジア諸国連合）に加盟する一〇ヶ国（フィリピン、マレーシア、インドネシア、シンガポール、タイ、ブルネイ、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマー）に、二〇〇二年に独立した東チモールの一ヶ国をあわせた領域とするのが一般的である。しかし、その ASEAN にしても、一九六七年の結成当初は、フィリピン、マレーシア、インドネシア、シンガポール、タイの五ヶ国が加盟するだけであった。一九八四年に加盟したブルネイをふくむ自由主義陣営六ヶ国と、社会主義国家であるベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマーの四ヶ国とは、

宗教の現代的諸相

第2部

没交渉の時代がなかった。これら両陣営の関係に変化が生じたのは冷戦終焉後のことであり、ASEANが一〇ヶ国体制となったのは、一九九九年のことすぎない。

そもそも東南アジアという名称は、第二次世界戦争中に連合軍がコロロンボにおいて「東南アジア司令部」に由来する。それ以前は、英領マラヤや仏領インドシナ、蘭領東インドなどに分割されることはあっても、現在のような東南アジアといった地政学的な「まとまり」は存在しえなかった。

まとまりの希薄さは、それぞれの国家にもあてはまる。たとえば、七〇〇あまりの島じまに一〇〇の民族がくらすフィリピン共和国を例に考えてみよう。もともと「フィリピン」という国家があつて、それがスペインの植民地にされ、その後のアメリカによる被植民と日本による被占領をへて、戦後にふたたび独立を獲得したのではない。スペインがやってきた時、フィリピン諸島の大部分は村落連合を形成する程度にすぎず、より大きな社会組織を育ててはなかった。現在のフィリピンの版図は、スペインやアメリカはもとよりイギリスやオランダなどが、近隣の島じまを囲いこむ過程で形成されたのである。

フィリピンのイスラーム

フィリピンは、アジアで唯一のキリスト教国と形容されることがある。人口七千五百万の八割がカトリック、一割がプロテスタントである以上、これ自体にうそはない。しかし、だからといって人口の四パーセント強を占めるムスリムの存在と、それらの人びとがフィリピン諸島南部に集住していることを無視してはならない。

この一五年間、わたしは、フィリピン南部から、マレーシア東部、インドネシア東部にひるがる多島海のサンゴ礁社会で調査をおこなってきた。いずれも、いわゆる東方イスラーム世界を構成している。とはいえ、ムスリムが少数派のフィリピンとムスリムが主流派のマレーシアやインドネシアでは事情がことなっている。たとえばイスラームを公式宗教とするマレーシアは、人口二千五百万のおよそ六割強がムスリムである。そして世界最大のムスリム人口を擁するインドネシアは、人口二億二千万の九割がムスリムである。世界で一二億のムスリム人口の二割ちかくを、インドネシアが占める計算となる。ともに多言語多民族社会であるマ



フィリピン最古のモスクで祈る人びと
(1993年11月、スル諸島のシムヌル島)

レーシアとインドネシアの国語は、もともとマラッカ海峡南部で話されていたマレー語とよばれる言語を基盤としている。というのも、それぞれの国家が建設される以前に、すでにマレー語が、マレー人以外の民族間コミュニケーションにおいて「族際語」として使用されてきたからである。たとえば、一五一一年にポルトガルが攻略したマラッカは、中国や東南アジアの商人とインド洋以西の商人とが集う港市であり、そこで共通語はマレー語であった。もちろん、当時はマレーシアもインドネシアもフィリピンも成立していなかったから、国語などという概念は存

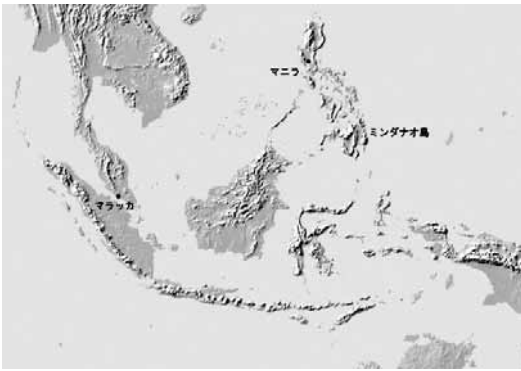
在しておらず、マレー語は域内最大市場であるマラッカに参入するため必須言語という機能をはたしていた。フィリピン南部は、このマレー語通商圏の辺部に位置した。とはいえ、みなが民族語とマレー語のバイリン



祈りのあと、モスクでくつろぐ人びと
(1993年11月、スル諸島のシムヌル島)

ガルであったわけではない。当時の東南アジアは、河川や海岸部に築かれた港市を中心に社会が形成されていたが、港を管理する役人にはマレー語の素養がもとめられたし、支配層は婚姻をつうじて互いに結びついていた。この交易をつうじて形成されたマレー語通商圏に共通の宗教あるいは文明として伝播したのが、イスラームであったのである。

中国貿易をもくろんだスペインはマニラを拠点とさだめ、一五七一年以降にフィリピン諸島の植民地化を加速させていった。その方策のひとつが、住民のカトリック化にあった。しかし、ミンダナオ島を中心とするフィリピン諸島南部には、すでにイスラームが浸透しており、小規模ながらも王国を築きつつあった。当然、かれらは被キリスト教化に抵抗した。結果として、スペインの三〇〇年におよぶ植民地化にフィリピン南部のイスラーム勢力は、最後まで抵抗し



東南アジアとミンダナオ島

つづけることとなった。

フィリピンが現在の版図を完成するのは、アメリカ期となった一九一〇年代のことである。米西戦争の戦

後処理の一環としてアメリカはスペインからフィリピン諸島をゆずりうけたが、当然、この版図に南部のイスラーム地域が入っていないかった。その後、米軍は圧倒的な武力によって、南部イスラーム地域の「フィリピン化」をはたしていった。ムスリムの土地に入植したキリスト教徒たちは、自分らに都合のよい開発をおこなっていった。

第二次大戦後に独立したフィリピン共和国において、スペインに最後まで抵抗したムスリムたちは、本来ならば「反植民地主義運動の英雄」と讃えられてしかるべきであった。

しかし、かれらは、独立後の中央政府にまで叛旗をひるがえし、分離独立を要求したため、スペイン人でもアメリカ人でもない、「フィリピン」人に抑圧されることとなったのである。

その分離独立要求が武力闘争をおび、内戦化するの、故マルコス大統領が戒厳令を実施した一九七二年以降のことである。フィリピン国内に一三いるムスリム民族集団の有力民族であるタウスグ人のミスワリが（モロ民族解放戦線（MNLF）を）結成し、リビアなど中東諸国の援助をうけ、イスラーム地域の独立を要求したのである。この運動にたいし、マルコス大統領は、国軍を投入し、分離独立運動の中心地の空爆さえ辞

宗教の現代的諸相

さなかつた。一九七四年二月のことである。多数の民間人が被害にあつたのはいうまでもない。その後も一九七〇年代をつうじて内戦は各地でくりひろげられた。

MNLFは、マルコスを追放したアキノ政権の後継者であるラモス政権下の一九九六年にOIC（イスラーム諸国会議機構）とインドネシア政府の仲介により、正式にフィリピン政府と和解した。が、MNLFの元兵士らが組織するアブサヤフ、一九七八年にMNLFとたもとをわかつたモロ・イスラーム解放戦線（MILF）は、いまだ政府と和解が成立しておらず、一部の地域では政府軍との紛争がつづいている。

アブサヤフもMILFも、イスラーム原理主義だとかイスラーム過激派などと報道されている。イスラーム原理主義の定義をはじめ、報道の真偽をここで議論する紙幅はない。ただ一言だけのべるとすれば、原理主義や過激派というレッテルは、当事者ではなく報道側が名づけた他称であるということだ。そこに暴力やテロ、不寛容、反近代、反米といったイメージがつきまわっていることは、容易に察せられる。

より重要なことは、「9・11」以降、これらのムスリム勢力がアメリカからテロ組織と断定されたため、

「テロとの戦い」を名目に、武力鎮圧の脅威にさらされていることである。実際に、フィリピン政府は、そのための予算をアメリカから獲得している。さらには、合同「演習」と称して、アメリカ軍とともに軍事行動もおこなっている。くわしくリサーチしたわけではないが、アフガニスタンやイラク以外で、米軍が直接の軍事行動をおこなっているのは、フィリピンだけではないだろうか。そこでは、イラク同様に多数の民間人が被害にあっている。

フィリピンの「ムスリム問題」は、「9・11」以降に突如として生じたのではない。フィリピンのムスリムたちが分離独立を要求する背景には、四〇〇年ちかくにわたって複雑にからみあつてきた社会経済的な要因が存在しているのである。その歴史性を考慮せず、ただ軍事力にまかせて平定しようとしても、それがうまくいかないことは、すでにイラクで学習済みのはずである。

（写真はすべて筆者による撮影）



イスラームを学ぶ。
（1993年12月、スル諸島のマヌクマンカウ島）



イスラームを学ぶ。
（1994年2月、スル諸島のマヌクマンカウ島）